

ビジネスの現場でも役立つ
本物の論理力を身につければ
人生が大きく変わる

「論理」とはものごとの筋道。「論理力」とは筋道を立てる力です」と出口さんは説明する。

たとえば、人の話を理解するときや筋道を立てて話をするとき。または、文章を理解するときや筋道を立ててものを考えるとき。すべての知的活動の根幹にあるのが論理力だと指摘している。

「勉強や受験に役立つことはもちろんですが、ビジネスパーソンにも間違いなく有効な力です。論理力があれば説得力のある企画書が作成できます。効果的なプレゼンテーションで契約を勝ち取ることもできますし、円滑なコミュニケーションによって人脈を広げることもできます。論理力があるか否かで人生は大きく変わると言えるでしょう。」

では、どうすれば論理力が身につくのか。「たくさん読書をすれば自然に論理力が身につくものではありません。論理力は理解するだけでは獲得できないため、トレーニングのように何度も繰り返し習熟することが大切です。」

「論理」を意識しながら聞いたり、話したり、書いたりしている間はまだまだ未熟。本当に習熟すれば、特別に筋道を意識しなくても自発的に論理的な考え方ができるようになり、それが普段のロジカルな行動に結びつくという。

ぶとはその規則やルールを知ること。互いに理解を深めるために学ぶわけですから「論理的な人」「冷淡な人」と考えるのは見当違いだと思います。」

現在、インターネットの世界では、諸問題について感情的な意見が飛び交うことが多い。そこには聞くにたえない罵詈雑言が含まれている。しかし、一方的に相手を罵倒するようなやり取りからは、相手を忌み嫌う気持ちしか生まれません。

出口さんはこのいさかいに対しても「互いに論理的に意見を出し合い、相手の立場を理解しようと努力すればもっと歩み寄ることができるといいます。」

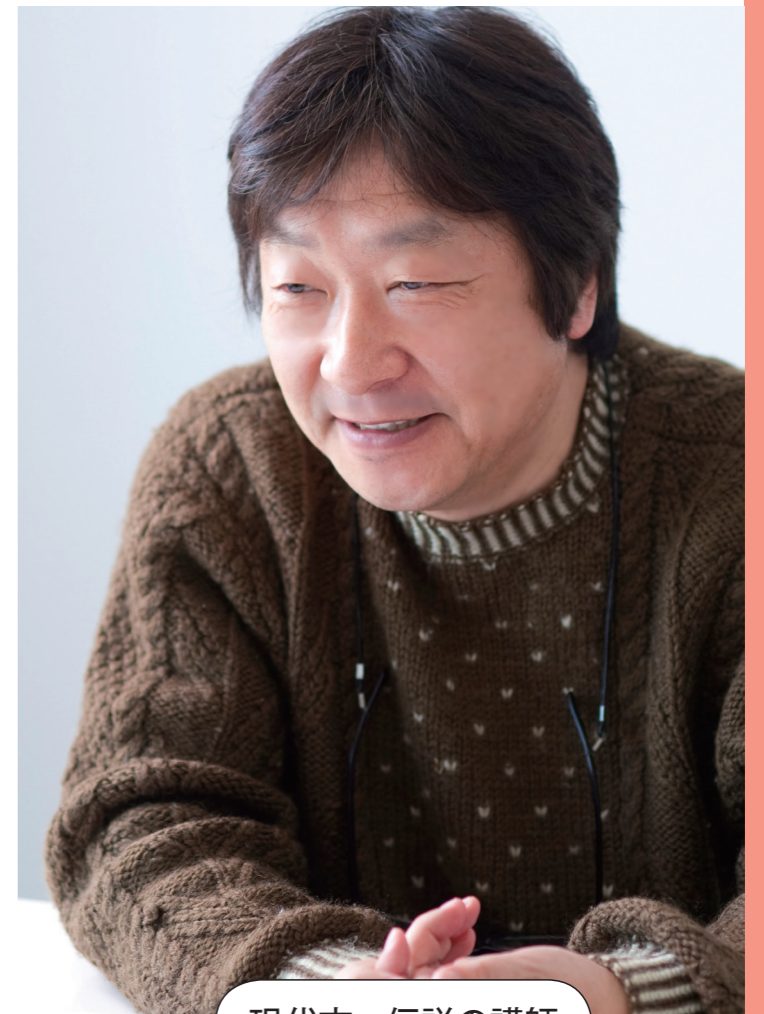
「誰もが納得できる結論を導くのは簡単なことではありません。しかし、論理的に話し、相手の立場や考えを理解しようと努力することで、最終的には互いに満足できる結論に到達できると信じています。」

この姿勢は、ビジネスの現場でもまったく同じことが言えるそう。最終的には人間対人間のつながりが大切。お互いに立場や利害が違っていても、論理を共通のルールにして言葉を交わせば、必ず相手を説得できるといいます。

「相手をだましたり陥れたりする必要はありません。ロジカルな人の話には説得力があります。そして、ロジカルに考え行動する人は信頼されます。ですから、ビジネスパーソンとして成功したいと願うなら、「論理」を磨く努力を続けてください。」

言葉巧みに相手を言いくるめようとしても、見透かされて失敗する。「論理力」は小手先のテクニックではない。時間を惜しまず、本物の力を身につけよう。

書きためることでトレーニング！
論理力がつくストックノート術



現代文・伝説の講師

出口 汪

Hiroshi Deguchi

PROFILE

1955年東京生まれ。広島女学院大学客員講師、出版社・水王舎を経営。宗教家・出口王仁三郎の曾孫。関西学院大学文学部博士課程終了後、大学受験現代文の伝説の講師となる。また、論理力養成のために開発された画期的な言語プログラム「論理エンジン」は現在、私立をはじめとする全国250校以上の小中高で導入されている。現代文、小論文の受験参考書のほか論理力に関する著書も多数。その累計部数は600万部を超える。

しかし、「ロジカルな人＝理屈っぽい面倒な人」というイメージが一般に定着していることも間違いはない。同時に「論理的な人＝情にうとくて冷淡な人」と考える人もいるだろう。

「それは人工言語の論理と自然言語の論理を混同しているからでしょう（詳細は次ページの下欄を参照）。「論理」は人を攻撃したり追い詰めるために使うものではありません。言葉は曖昧なものなので、人と人がお互いに歩み寄るためには共通の規則やルールが必要です。そして、論理を学

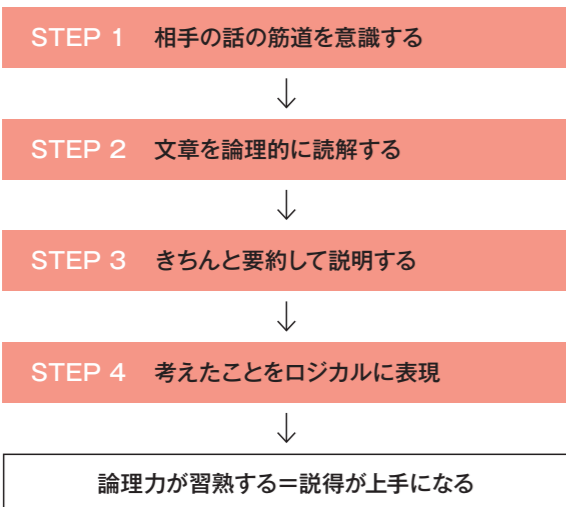
ロジカル・シンキングで説得上手な人になる



ビジネスの現場で相手を説得するためには論理力が不可欠。
ロジカルに話し、考え、行動できる人になれば、
仕事の結果はあとからついてくる。

論理力を身につけるための4つのステップとは？

論理力はたくさん本を読んでも身につかない。まずは筋道を意識して人の話を聞くことから始めてみよう。次に筋道をたどりながら文章を読み、そのあと文章を要約して書く能力を身につける。さらに、文章を読んで自分が考えたことをロジカルに表現できるようにトレーニングする。この4つのステップをふまなければ、本当の論理力を身につけることはできないと考えよう。



もともと「論理」には2つのカテゴリーがある

「論理」には2つのカテゴリーがあり、それを混同すると誤解が生じる。ひとつは人工言語における論理で、数学や物理学で利用される記号・数式・用法などの論理がこれに当たる。もうひとつは、自然言語（言葉）における論理。これは抽象的な概念における筋道であるため曖昧さを許容する。出口氏が語る「論理」とは後者で、論理力は言葉を使う規則を意識することで磨かれる。

